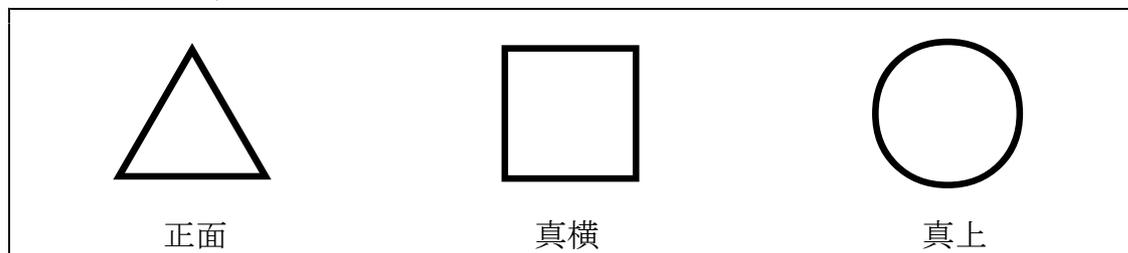


『真実の一つ』…は誤解です

唐突ですがクイズです。

正面から見たら正三角形で、真横から見たら正方形で、真上から見たら円に見える立体
つ
てあるでしょうか。



正解は「ある」です。

この立体に名称がついているのかどうか分かりませんが、存在します。

さて、今それぞれの角度から見た3人をAさん、Bさん、Cさんとしましょう。この立体が存在するわけですから、3人がそれぞれ自分の見たまを証言したとすればそれはそれぞれが真実であるといえます。つまり、全く異なる証言がみな真実であるということです。

名探偵コナンや金田一耕助は「真実の一つ」と言うかも知れません。しかし、人間が見たことや証言できることには限界があるのです。上記でおわかりのように、真実はその証言者の数だけあると思った方が良いでしょう。

学校では生徒指導上の問題が起こった場合、まず教師が該当の生徒から事情を聞きます。意図的に虚偽の証言をしている場合は論外ですが、生徒は正直に話してくれているという基本認識で教師は尋ねています。しかし、複数の生徒の証言の中に食い違いがあることがよくあります。この時、担当教師がコナンや金田一のように「真実の一つしかない。したがって、どちらかが嘘を言っている」と決めつけてしまったら生徒にとってこれ以上の不幸で迷惑なことはありません。生徒は神に誓って本当のことを先生に話しているわけですから、教師は「どの子も本当のことを言っている」と思って聞かなければなりません。

さて、このことを家庭に置き換えてみましょう。

仮に不幸にもわが子が何らかのトラブルに巻き込まれてしまったとしましょう。親御さんはまず、わが子に事情を聞くでしょう。いわずもがなわが子の証言は真実であるとの大前提でしょう。その時、もし相手方のお子さんの話すことに食い違いがあった時、「どちらかが嘘を言っている」と認識するか「どちらも正しい」という認識をするかでその後のご自身の態度や対応が大きく異なります。

そんなことをしては見えるべき真実も見えてこないとお思いかも知れません。しかし、真実の一つという誤解から、真実を述べている子ども自身を見失ってしまっは本末転倒です。

抽象的な言い方で申し訳ありません。親はわが子への信頼は揺るぎないものとして、「相手方も正当かも知れない」という心のゆとりを持つことが生徒同士が自ら人間関係を修復しようとする力を育てることの支援になるのではないのでしょうか。

